

<実践研究>

**保健体育科教員養成における附属学校と学部の連携・協同の試み
—素材・教材選択を視点とした教育実習と教科教育法の授業の連続的体験—**

藤田育郎 信州大学学術研究院教育学系
岩田 靖 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：中学校保健体育，教育実習，素材・教材，球技，模擬授業

1. はじめに

本実践研究は、保健体育科教員養成における附属学校と学部が連携・協同した取り組みについて記述し、その成果について考察するものである。

大学・学部と附属学校の連携強化については、これまで様々なところでその必要性が指摘されてきた（中央教育審議会，2006；2015）。この大学・学部と附属学校の連携・協同といった視点を、教員養成といった側面から考えれば、その中心的場面は教育実習になるであろう。大学・学部と附属学校が教育実習、延いては教員養成という広い枠組みの中で、協同的な指導体制を構築していくことは、時代を問わず重要な使命・課題であることは言うまでもない。

信州大学教育学部と附属長野中学校の保健体育科では、これまで教育実習の充実・改善に向けたいくつかの取り組みを行ってきた。例えば、学部での教科の指導法の授業内容をベースとしながら、附属学校の実習指導教員が組織的観察法による授業記録（期間記録法など）を実習生にフィードバックすることで「よい体育授業を成立させるための条件」（高橋，2010）の主に基礎的条件（授業の勢いや授業の雰囲気）についての認識を深めようとした取り組みが挙げられる。また、特にここ数年では、教育実習で実習生が指導担当する素材・教材の選択について、附属長野中学校の教員スタッフと本学部で教科の指導法の授業科目を担当するスタッフの間に意思疎通を図ってきた。このことの具体的な経緯について記述しておきたい。

教育実習で実習生が指導担当する素材・教材選択の問題については、まさに今年度、2019年度から新たな試みとして着手したところである。このような経緯には、次に示す問題点が背後に存在している。2018年度の3年次教育実習では、球技領域のゴール型（バスケットボール）を素材として取り上げ、その授業づくりのプロセスにおいて教材づくり（ここでは「単元教材」レベルに相当する「メイン・ゲーム」を対象とした教材づくりのことを指す）から出発させることとした。しかしながら、ゴール型のゲームが有する戦術的な複雑さが主に起因となり、実習生がゲームをモニタリングする難しさやゲーム場面において課題解決に直結する具体的なフィードバックが極めて貧乏なものになってしまうことが確認できたことである（藤田・岩田，2019）。

これらの事実を附属学校の実習指導教員と学部の教科教育担当教員の間で共有しつつ、2019年度は、同じ球技領域のネット型を素材選択の対象としたのである。なぜならば、一般的にネット型のゲームは、その構造あるいは戦術的課題の側面において、ゴール型と比べると子どもたちにとって「わかりやすい」ものであると認識されているためである。この子どもたちにとっての「わかりやすさ」は、指導する側の実習生においても同様の意味を有しているのではないだろうか。つまり、前年度の教育実習の課題として確認されたゲーム中のモニタリング行動やそれに基づくフィードバック行動にも肯定的な変化をもたらすものと考えられる。

加えて、2019年度は、本稿の第二著者である岩田（2012, 2016）がこれまで開発を試みてきたゲーム教材である「アタック・プレルボール」、「ダブルセット・バレーボール」、「ダブルバウンド・テニス」を単元教材（メイン・ゲーム）として位置づけることとした。これらは、技能レベルや既習経験といった子どもたちの実態を想定した、いわば修正したゲームであることに加え、附属長野中学校のカリキュラムにも取り入れられており、附属教員も熟知しているものである。

なお、この素材・教材選択に関するより詳細な背景・経緯については、本誌に掲載されている筆者らの別稿（岩田靖・藤田育郎「中学校保健体育の教育実習における授業の教材選択に関する実践的検討」）を参照して頂きたい。

2. 教育実習と教科の指導法における連携

2.1 教育実習と学部におけるカリキュラム

表1には、本学部で開講している教科の指導法に関する科目と教育実習の位置づけを示した（本研究に関連する一部のみを示している）。まず2年次において、必修科目である「中等保健体育科指導法基礎」（第二著者担当）を履修し、3年次の「教育実習Ⅰ」において、附属長野中学校に配属された実習生たちは球技教材の指導を行う。その後、教育実習が終了した3年次後期には、「中等体育科指導法演習」（第一著者担当）を履修し、教育実習において認識した自身の課題解決を目指す模擬授業に取り組むこととしている。

表1 教科の指導法に関する科目と教育実習の位置づけ

履修時期	2年次前期	3年次前期	3年次後期
授業名称等	中等保健体育科指導法基礎	教育実習Ⅰ	中等体育科指導法演習
授業内容等	教師行動や教材づくりの 基本的概念の講義	球技教材を指導	教育実習における 課題解決を目指す模擬授業

2.2 教育実習と教科の指導法における連携の視点の創出

このような一連のカリキュラムにおいて、これまでも教育実習と教科の指導法に関する授業科目を関連させようとする試みに少なからず取り組んできた。例えば、藤田・岩田(2019)で報告したように、児童・生徒に対して十分な賞賛・助言ができないといった「教育実習Ⅰ」における課題の解決を目指して、大学の授業で模擬授業に臨ませた取り組みなどである。そのプロセスでは、実習生自身の授業映像を視聴させ、相互作用行動(特に具体的情報を伴った肯定的・矯正的フィードバック)を営むための方策について検討する反省を実施させている。しかしながらここでは、本稿で問題としているような素材・教材選択の側面において、実質的な連携の視点は組み込まれていなかったと言える。

先に示したように、2019年度は実習生が指導を行いやすいと思われるネット型を素材として選定するとともに、子どもたちの実態を想定して修正されたゲームを単元教材として教育実習に取り組ませることとした。このような試みによって、実習生たちは子どもたちのゲーム中の様相をより鮮明にとらえることが可能になると想定される。さらにそれは、実習生たちの授業実習の手応えを確かなものにするるとともに、課題をより明瞭に自己認識することにもプラスに影響するであろう。これらの成果や課題を大学に持ち帰り、改めて模擬授業という場面で同じ素材・教材を対象とした授業づくりを試みることで、教材解釈やそれに基づいた指導の在り方を洗練させていく視点を獲得できるのではないだろうか。このような教育実習と教科教育法の授業を連続的に体験させることによって、実習生たちが認識する成果や課題について検討してみたい。

3. 研究方法

3.1 2019年度「教育実習Ⅰ」の概要

2019年度「教育実習Ⅰ」において、附属長野中学校に配属された3年次生は7名であった。そのうち、先に示した「アタック・プレルボール」、「ダブルセット・バレーボール」、「ダブルバウンド・テニス」、これらネット型の単元教材を2名ずつが担当し、残る1名はベースボール型を受け持つこととなった。

教育実習終了後の3年次後期に学部で受講させている「中等体育科指導法演習」では、気候の関係からベースボール型を模擬授業で取り扱うことが困難であるため(冬季の屋外での実施となるため)、ネット型を担当した6名に本研究の調査対象を限定した。

3.2 「中等体育科指導法演習」の概要

表2は、2019年度後期に開講した「中等体育科指導法演習」の授業展開を示したものである。本研究の調査対象となった6名は、附属長野中学校で指導を行った「アタック・プレルボール」、「ダブルセット・バレーボール」、「ダブルバウンド・テニス」の模擬授業グループにそれぞれ配属させた。模擬授業グループでは、授業づくり・指導計画の作成において、教育実習で得た成果や課題をグループのメンバーと共有させ、それらを基にした授業づくりに試みることとさせた。

表2 「中等体育科指導法演習」の授業展開

回	内 容	回	内 容
1	グループ分け, 担当教材の決定	8	模擬授業① アタック・プレルボール
2	マイクロティーチング①	9	模擬授業② ダブルセット・バレーボール
3	マイクロティーチング②	10	模擬授業③ ダブルバウンド・テニス
4	授業観察・授業評価の手法	11	マイクロティーチング③
5	授業づくり・指導計画の作成	12	マイクロティーチング④
6	授業づくり・指導計画の作成	13	模擬授業④ 走り高跳び
7	授業づくり・指導計画の作成	14	模擬授業⑤ マット運動

3.3 実習生に対するアンケート調査の概要

本研究の調査対象となった6名に対して, 図1に示す自由記述形式によるアンケート調査への回答を求めた。教育実習で指導を経験した単元教材を対象として, 改めて模擬授業という場面で授業づくりに臨むことで得られた新たな発見, 教育実習で得た成果や課題を再認識したことについて問いかけたものである。なお, 「模擬授業①アタック・プレルボール」, 「模擬授業②ダブルセット・バレーボール」, 「模擬授業③ダブルバウンド・テニス」が終了した12月下旬に調査を実施した。

附属長野中学校 教育実習Ⅰ 受講生へのアンケート

今年度の教育実習Ⅰでは, 「球技」領域における修正したゲーム(アタック・プレルボール, ダブルセット・バレーボール, ダブルバウンド・テニス)を単元教材として取り組んでもらいました。

その後, 改めて模擬授業という場面で同じ教材を用いた授業づくりに臨んでもらいました。このようなプロセスで, 新たな発見を得たり, 教育実習で得た成果や課題を再認識したりしたことについて, 具体的に記述をしてください。

図1 教育実習生に対するアンケート調査

4. 実習生によるアンケート結果に対する考察

ここでは、調査対象となった6名の実習生によるアンケートの記述内容を示し、それらに対する考察を加えることとする。実習生A・Bは「アタック・プレルボール」、実習生C・Dは「ダブルセット・バレーボール」、実習生E・Fは「ダブルバウンド・テニス」を単元教材（メイン・ゲーム）として教育実習および模擬授業に取り組んでいる。なお、記述量が膨大であったため、重要と思われる部分を抜粋して示すこととしたい。

○実習生 A

改めて模擬授業をしてみて再認識したことは、アタック・プレルボールにおいて、連携した攻撃につなげるためには、やはりコートの中あたり（Tゾーン）にレシーブを集めることがよいということをも早めに気づかせることが大切だと感じました。「人」につなぐのではなく、「空間」につなぐことで狙いやすくなり、連携できると感じました。

模擬授業の中で、レシーブが乱れたボールでも第2触球を下にたたきつけている場面が見られました。「第2触球はセットしなければならない」のような素朴概念を取り払うことも、大きな技術発達につながると感じました。

○実習生 B

成果に関しては、模擬授業の指導案作成の際に、中学生たちがなかなかできなかったことを班員に伝え、それらを指導内容として取り上げたこと。さらに取り上げたことに対する練習方法も考えやすく、班員と共有しやすかった。

新たな発見について、自分はダブルバウンド・テニスに本授業まで一度も取り組んだことがなかった。中学生の授業を参観していると、「なぜできないのだろう」と思う場面があり、実際に取り組むと自分もできなかった。中学生と同じ立場になることで、他者に伝える力やなぜ上手にできないか考える力がつくと感じた。

実習生Aは、ネット型における戦術的課題の解決に直結する内容を単元のなるべく早い段階で子どもたちに認識させることの必要性を記述している。この背景には、記述の中にもみられるように、ある程度の技能レベルである大学生を対象とした模擬授業においても、ゲーム中のレシーブが乱れてしまい、ネット際でのセットに結びつけられていない場面を観察したことが存在していると思われる。十分な学習成果を子どもたちに実感させるためには、単元をどのように展開していく必要があるかといった、時間的思考の視点を改めて認識できたことを成果として感じているようである。

また、実習生Bの記述からは、中学生の実態を模擬授業グループのメンバーと共有し、さらにその事実から練習教材づくりに取り組めたことを成果として解釈していることが読み取れる。なお、実習生Bは、自身が生徒役として参加した別の単元教材を対象とした模

擬授業に対しても「中学生と同じ立場になること」の必要性を記述している。教育実習で指導した単元教材を改めて模擬授業で扱うことが、子どもたちの実態を踏まえた授業づくりの必要性を再認識することに貢献していたと推察できる。

○実習生 C

成果としては、声かけ、着目すべきポイント、どのタイミングで声をかけていくか、が挙げられるのではないかと感じました。声をかけていくポイントについてですが、実際の授業だと全員がコート上にいることはほぼ無理なので、試合を観ているときによりプレイを指さして一緒に見たり、ドリルを行っているときに苦手なことを一緒に練習したりできると学びました。

模擬授業での新たな発見は、大学生の発見の多さです。サーブについて、中学生は入りがラリーをつなげることからの授業展開だったのですが、大学生になるとそこから作戦に含まれると考える人もいてレベルが違っていると感じました。

○実習生 D

教育実習では毎時間、個人の振り返り、グループの振り返り、ゲーム記録を書いていた。授業前にそれらの記録から課題などを読み取り、ある程度子どもの反応を予想して発言がしやすいような問いかけを考えて授業に臨んでいた。今回の模擬授業では前時までの記録がない状態だったので、反応が予測しにくかったように思う。実習中、子どもたちに色々書かせた記録にかなり頼っていた部分があったのを感じた。短い時間でいろいろ書くのも子どもたちは大変だろうし、私自身が子どもたちの姿から課題などを読み取る力をもっと高めたいと思った。

また、実習ではゲームが中心で、練習教材をほとんど提示しなかった。「子どもたちに考えさせる」ことで授業を進めていたが、授業の中で各チームが考えた練習方法を紹介する時間があればよかったと思った。子どもたちに考えさせるような授業を行うことができたのは、附属中だったからできた部分も多くあったと思う。今回の模擬授業では、練習教材を考えて提示したが、そのようなこともやっていく必要があると感じた。

実習生 C は、声かけのポイントやタイミングといった主に教授行為の側面からの成果を記述している。実習生 C は、模擬授業で教師役を担当した。模擬授業では 20 名程度の少人数を対象にしたため、生徒役の活動をモニタリングし、それに基づいて賞賛や助言のフィードバックを与えることに一定の手応えを感じることができたのであろう。より大人数を対象とする実際の授業場面を想定した際の工夫の視点についても、模擬授業での経験を踏まえて記されている。

一方の実習生 D は、一つ目の視点として個人やグループの課題をクラス全体で共有するための方略について記述している。教育実習では子どもたちに記入させた授業の振り返りやゲーム記録に基づいて課題を把握していたが、単元の一部を切り取って行う模擬授業

では、それができなかった。振り返りやゲーム記録から子どもたちの課題を読み取ることの大切さを認めつつも、子どもたちの活動の様子から教師が課題を見取る力を身につける必要性を認識したようである。なお、二つ目の視点としては、単元教材におけるゲームの出来栄を高める練習教材（下位教材）づくりの必要性について記述している。先に示した実習生 B と同様に、大学生を対象とした模擬授業を通して、中学生の技能的な実態を改めて思い起こすことで認識したことであろうと推察できる。

○実習生 E

今回改めて模擬授業に取り組む過程で、一時間だけを切り取って授業をすることの難しさを感じた。大学生相手ということで技能面の問題を排除して考えられたが、本時までの授業の流れが明確にイメージできないと授業に入ることは難しいため、いかに単元を通しての流れが必要であるかを痛感した。

また自分は授業者ではなかったが、外から授業を参観し、導入場面でいかに子どもたちが考えるきっかけとなる機会を設けられるかが大切であると思った。導入がただの説明になってしまっただけでは、教師が授業しているだけで子どもたちの主体性はまるでなくなってしまう。つまり、ゲームの中で空間にボールを投げて相手が偏った時によくノータッチボレーが決まったことに何となく気づき、最後の授業の振り返りで教師がその行動を言葉にしてチャンスになることを根拠づけてあげることによって、子どもたちは自分のプレイがチャンスにつながるものだと身をもって実感し、理解することができるのだと学んだ。

○実習生 F

はじめに、再認識したという点で、このダブルバウンド・テニスでは、攻守一体プレイの攻防の面白さを味わうために、前衛と後衛の役割を明らかにして、それぞれのポジションにふさわしい「仕事」を認識することが最重要であるという点である。模擬授業としてダブルバウンド・テニスを行ったが、一時間の授業では、なかなか前衛と後衛の連携がみられず、「甘い球が来たから」「なんとなく打てそうだから」という理由で前衛が動き出し、ボレーに挑んでいた。後衛の配球の意図を読み取って、という行動があまりみられることがなかった。

直感的な動きは、運動が得意な生徒ならできるかもしれないが、不得意とする生徒は苦勞するだろうから、「意図を読み取る」「配球のセオリー」みたいな点を共有できると攻守一体プレイの魅力をつかむことができるのではないだろうか。ただ、その具体的な手立てはなかなか見つからない。難しいが、やりがいはあると感じた。

実習生 E は、単元の一部を切り取って実施する模擬授業の難しさを指摘し、単元という一つのまとまりを視野に入れた指導の重要性を記述している。また、導入で課題を提示する場面では子どもたちの主体的な思考活動を大切にすること、さらにまとめの場面にお

いては子どもたちが学習の成果を実感できるようにすること、このような指導の在り方を洗練させていく必要性を、ダブルバウンド・テニスの戦術的課題の側面から学び取っているようである。なお、実習生 E は模擬授業に観察者（授業記録）役として参加している。他者の指導を客観的に観察する経験が、このようなことを再認識する契機になったと推察できる。

最後に実習生 F は、ダブルバウンド・テニスの戦術的課題について深く記述している。ここでも実習生 E と同様に、模擬授業という単元の一部を切り取ることの難しさを前衛と後衛の意図的なプレイの実現度から指摘している。しかしその一方で、教育実習で実施した単元教材であるダブルバウンド・テニスの戦術的課題、いわば本質的な面白さをさらに深く追究していく契機として、模擬授業の経験が有効に機能したことを読み取ることができる。なお最後には、運動が苦手な子どもたちにこのゲームの魅力に触れてもらうための具体的な手立てについて考えることの必要性や、そのやりがいについて記述している。教育実習で指導した単元教材を改めて模擬授業で取り上げて授業づくりに臨むといった一連のプロセスが、新たな学びの視点を提供してくれたようである。

5. おわりに

本実践研究では、保健体育科教員養成における附属学校と学部が連携・協同した取り組みについて記述し、その成果について考察するものであった。教育実習で担当した球技領域における素材・教材を対象として、改めて模擬授業という場面でその授業づくりを試みることで、教材解釈やそれに基づく指導の在り方を洗練させていく視点が獲得されることを期待した。いわば、教育実習と教科教育法の授業を連続的に体験させるプロセスにおいて、素材・教材選択の側面から附属学校と学部が連携した試みである。

調査対象とした 6 名の教育実習生によるアンケート記述について考察したところ、教授行為を洗練させていく視点、生徒の実態を想定した授業づくりの必要性、単元構成や単元展開の時間的思考にかかわる視点、単元教材としたネット型ゲームにおける戦術的課題に対する認識の深まりなどが記述されていた。そしてこれらは総じて、教育実習において実習生たちが認識した成果や課題が土台となって学び取ってくれた事柄であると考えられた。よって、2019 年度に新たに取り入れた「素材・教材選択を視点とした教育実習と教科教育法の授業の連続的体験」の試みは、おおむね良好な成果が得られたものとして解釈できるのではないだろうか。

なお、今後の課題として以下の点を挙げておきたい。主に、実習生 E と F が共通して記述していたことであるが、模擬授業を単元という一つのまとまりを前提として指導することの必要性である。これまでも、単元全体の学習課題や前時および次時のつながりを明確にさせて授業づくりに取り組ませていたが、単元の一部を切り取って指導する模擬授業に単元としてのリアリティをさらに持たせる工夫の視点を今後検討したい。

文 献

- 中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）.
- 中央教育審議会（2015）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）.
- 藤田育郎・岩田靖（2019）保健体育科教育実習の充実に向けた取り組みの成果と課題－学部と附属学校の連携・協同の在り方－. 信州大学教育学部附属次世代型学びセンター紀要『教育実践研究』, 18 : 149-158.
- 岩田靖（2012）体育の教材を創る－運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて. 大修館書店.
- 岩田靖（2016）ボール運動の教材を創る－ゲームの魅力をクローズアップする授業づくりの探究. 大修館書店.
- 高橋健夫（2010）よい体育授業の条件. 高橋健夫ほか編著，新版 体育科教育学入門. 大修館書店，pp.48-53.

付 記

本研究は，JSPS 科研費 JP17K01632 の助成を受けて実施したものである。

(2020年 1月22日 受付)
(2020年 3月13日 受理)